

「えのきはいむ 北リハビリテーションセンター統合記念事業

講演会・シンポジウムを終えて」

堺市の療育をつなげよう ひろげよう 新しい時代へ

～ 子どもたちの未来につながる支援とは ～

上記のテーマで講演会とシンポジウムを企画しました。

えのきはいむの設立当初から関わってこられた八田忠敬氏より、当時を振り返ってお話を、また、小田浩伸氏からは、子どもの理解と支援について、基本的なところのお話をいただきました。

最後に、行政、教育、保護者、そして、主催である社会福祉事業団の立場から、今後の支援のあり方について語っていただきました。

1. 日時：令和元年5月25日（土）午後1時30分～4時30分
2. 場所：堺市総合福祉会館ホール
3. 内容：
 - ① 基調講演 八田忠敬 氏（社会福祉法人コスモス元理事長）
「堺市の療育のはじまり ～えのきはいむの歴史を通して～」
 - ② 基調講演 小田浩伸 氏（大阪大谷大学教育学部教授）
「多様なニーズのある子どもの理解と支援について
～療育と教育の今後にむけて～」
 - ③ シンポジウム「堺市における障害児支援の新しい展開」
進行・助言 小田浩伸 氏（大阪大谷大学教育学部教授）
パネリスト 松久眞実 氏（桃山学院教育大学教育学部教授）
小田多佳子氏（堺障害者団体連合会・NPO 法人ぴーす理事長）
石戸博晃 氏（堺市子ども青少年局子ども家庭課長）
篠原純代 氏（堺市社会福祉事業団 第2もず園長）
4. 参加者 約200名

【基調講演 八田忠敬氏 より】

戦後、新しい憲法のもと、いろいろな法律が整備されていったが、八田氏が堺市に勤務した1960年代は、障害のある子どもが就学猶予免除ということで、学校へ行くことができませんでした。未就学の子どもを受け入れるために誕生したのが「えのきはいむ」でし

た。1969年6月、三国ヶ丘病院内に誕生した同園は、浜寺石津町に場所を移し、今年3月に閉園を迎えるまで、さまざまな障害のある子どもたちを療育してきました。その苦労の歴史を熱く語っていただきました。

<舞台中央が八田氏>



【基調講演 小田浩伸氏 より】



<舞台中央よりやや左に立つのが小田氏>

障害のとらえ方（ICFの考え方）からお話がはじまり、障害者の権利条約が批准され、障害者差別解消法の誕生とともに「合理的配慮」と「基礎的環境整備」が謳われるようになり、そのことについて、わかりやすく解説していただきました。そのあと、多様なニーズのある子どもへの支援について、短時間で要点のよくわかるお話をいただきました。特に失敗したり、

トラブルになったりして、自己肯定感が乏しくなっていくことが問題で、子ども同士をつなぐ言葉がけや、安心してやる気の出る集団作りについてお話をいただきました。合間に、このスライドの中に何がいますか？など、ユーモアもあり、リラックスできる時間もとっていただきました。

【シンポジウムより】

最初に、シンポジストが自己紹介も兼ねて、それぞれが堺の療育にどのように関わってきたのかお話いただきました。

石戸課長は、行政の立場から、堺市子ども家庭課が所掌している業務内容を。篠原園長からは、スライドをまじえて、北リハビリテーションに新しくできた施設の紹介を。松久教授からは、学生時代からえのきはいむと関わり、堺の教員となって、神石小学校藤谷学級で勤務されたことを。そして、小田理事長からは、保護者とし

て、えのきはいむでお世話になり、苦しい時を乗り越えられたこととお話いただきました。

<現在の到達点は？>

- ・児童発達支援センター（社会福祉事業団）の役割として、子どもとして当たり前の生活、集団のある療育生活を提供している。その上で、診療所、セラピストなどの医療職と一緒にあって支援していること。
- ・子どもの居場所、学ぶ場が増えたこと。
- ・保護者同士がつながれるように努力していること。
- ・幼稚園や保育所等へ行きながらの並行通園が平成26年度からはじまり、需要が高まっていること。
- ・早期発見、早期支援の必要性が確認されてきたこと。
大学生で支援の必要な人が入ってきている。その人たちの中には、個別の支援計画を高等学校から引き継いできているケースもある。しかしながら、その人たちの方が、支援を受けずに入学してきた人よりもうまくいっている。
- ・子どもを支えるのは保護者だけだったが、障害のとらえ方が、マイナスイメージから、こんなことができるのだと、社会の見方が広がってきたこと。



<今後の課題>

- ・ベテランの大量退職で若い先生への伝達が課題。
- ・気軽に相談できるような体制をさらに増やしていく。
- ・福祉と教育の連携、地域のリソース、放課後等デイサービスとの連携。
- ・社会福祉事業団としては、子育てで少しでも気になることがあれば、気軽に相談できるような事業団でありたい。
- ・サービスも増えてきたが、自分の子どもにどんな選択肢があるのか、それを学ぶ場が少ない（必要）。若い人たちの家庭では、共働きの家庭が増えたため、保護者同士のつながりも薄くなってきた。支援のつながりにくい保護者に対しても、子どもの障害を否定する気持ち乗り越えることが必要。しかし、苦しまないと乗り越えられない。専門機関との関わりも必要だが、「こんなことができるようになったね。」などの励ましの言葉をかけてくれる地域の方の力が大きい。堺はこれまで行政主導ではなく、保護者が立ち上がり、そこへ行政も一緒になってやってきたという経緯がある。地域とつながっていけるようなムードが広がることを期待したい。

<まとめ>

到達点がこれだけすらすらと出てくるのがすばらしい。様々な関係機関との連携の大切を確認しました。子ども、保護者、支援者が元気の出る障害児支援。それが社会全体に広がることを願います。

【参加者のアンケートより】

◎私は成人期の障害者福祉の未来を担っていますが、本日の話を聞いたおかげで、人ひとりの人生を支えていける仕組みが充実してきたこと、堺が積極的にとりくまれてきたことが、よく理解できました。(福祉事業所職員)

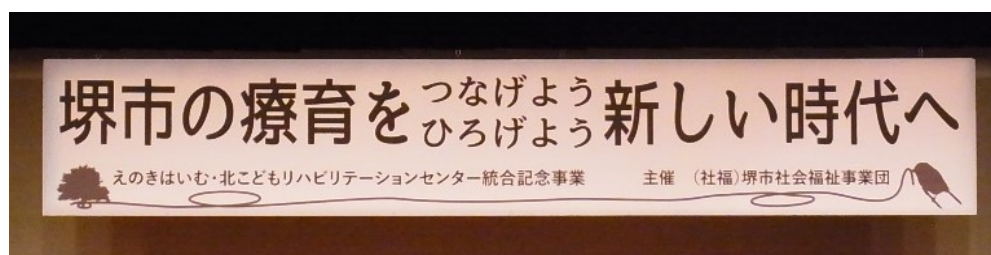
◎当園でも様々な機関と連携をとりながら、子ども・保護者に寄り添っていきたいと思いました。(こども園職員)

◎小田先生の話、デイサービスで活かしていきたいと思いました。ありがとうございます。(放課後等デイサービス職員)

◎ぴーすのおもちゃ広場でお世話になりました。キッズサポートの発達相談も受け、受診の予約も取れていますが、ぴーすに行かなければつながらなかったと思います。やはり保護者の言葉は大変重たく、心に響くものでした。涙が出ました。(保護者)

◎ありがとうございました。保護者(父)としての観点ですが、障害をもつ父親同士のつながりが薄いように思います。事実として、私もそのようなつながりがありません。父親同士がつながることで、もっと色々な可能性が見いだせると思いました。(保護者)

◎社会の隅に追いやられていた障害のある子どもたちが、やっと人として育つ場ができてきたことがわかりました。私の知っていた以上に、これまで大変な努力があったことが。(保護者)



会場の横断幕

舞台上につるされていたものです。

文字の下にある絵や線があります。左下の木は「えのき」で、えのきはいむを表しています。右下の絵は「もず」でもず園を表しています。「えのき」から「もず」へ引き継がることを表現しました。